

春のもの音

水野仙子

○ 部屋の入口の襖を閉め忘れても、それが決して不自然な間違つた事のやうでなくなり、すう／＼する寒い風も吹き込まなくなつた。その入口の廊下を越えて、鐵の格子と動かぬ簾との外に、駿河臺の閑靜な横通りがある。

リーン！ と軽く疾驅してゆくゴム輪の音、時にはブー／＼と厭な自働車の地響も傳はるけれど、其後から、暢氣相にタラン／＼と叩いて行く齒入れ屋の鼓の音で慰められる。

「サツクサツクサツク、サツクサツクサツク、」續いて切れ目なく、「サツクサツクサツク、サツクサツクサツクサツク！」

その揃つた調子がだん／＼近づいて來ると、少しざはついて、「ザツクザツクジツク、ザツクザツクザツクザツク！」

中學生の一隊が驅足で通るのである。

それから暫く間を置いて、何ともいへず輕やかな日和駄の音が、道のいゝ高臺の土に響き渡る。

「すつかり春の足音だね。」

枕許に散つてゐる藥の包紙をひねつて屑籠に入れたり、轉んだ牛乳の空瓶を廊下に出したりしてゐた道三が、すつかりそんな雜念に捕はれてゐるものと思つてたのに、意外にも突然さういふ。

「つまらない！」

で、私は思はず呟く。今の今、惚れ／＼とその春らしいもの音に聞き入つてゐた癖に！

「何故？」

「自分一人で浮かれてるんだもの……」

しかし、問ふ方も答へる方も、薄く笑つてゐたので、言葉と共に笑ひも音に出、如何にもその春の齎すものに對する怨みを、可笑しな理に合はないことのやうにする。

で私は、健康な人が當然に持ち得る權利を咎めたやうなやましさを覺えながら、その心持に知らん振りをして、手をあけてつく／＼と自分の腕を眺め廻す。あんなに醜く腫れ上つた手が、今はすつかり細かな皺をたゝんで、普通以上に小さくなつてゐる。痩せて安心の出来る病氣はこの腎臓炎だけれど、しかし痩せ過ぎではやつぱり心細くもある。

かうして私の肉體が勝手に脹れたり痩せたりしてる間に春は來てしま

つた。顔を撫でゝ見る。どうやら近頃はわが顔のやうな氣がする。春を病むには醜く腫れてゐるよりも寔れてゐる方がせめてふさはしいかも知れない。それでは、

「いつてらつしやい！」と勤めに出掛けようとしてゐる道三を目で送る襖が閉る。その襖紙に無數に坐つてゐる「おかめ」さん達と、私は退屈な、そして氣分のわるい午後を無言で過ぎなければならぬ。ふと、

「春を下宿の一間に病む。」といふ言葉が額のあたりに浮んで来る。續いてその情景が他事でもあるやうに私の目に映つて来る。壁には裾のすり切れた外套が、首吊りのやうにだらりと懸つてゐる。その脇に下つてゐる手拭ひも、かうして見れば可なり黒くなつたものである。本棚の上の方に雑居した土鍋や、しなびた林檎寢てゐても手の届くやうなところに置かれたシトロンの瓶や牛乳、机の下には炭籠が潜んで居、机の上にはタカチアスターゼ錠の空になつたのが轉がつてゐる。病室であり、書齋であり、客間であり、その他すべてを兼ねるところの下宿の一間よ！

○

窓の外には、白い椿と赤い椿とが咲いてゐる。いつからかそれを言葉

には聞いてゐたけれど、きのふ初めて欄干ににじり寄つて、私はそれを見た。赤いのは田舎娘のやうに、強く、美しく、白いのは美しいやもめのやうに、靜かに寂しく笑つてゐる。

崖の下に根を張つたその二本の椿は麗かな春日を受けて、崖の上の部屋部屋を覗いてゐる。楓の若芽も強ひて開かされた嬰兒の手の様に、弱弱しく枝に着いてゐる。その茂みから、小鳥の行方を追つて、ふと眼を遙にそらすと、三崎町邊りと覺しい大きな建物の屋上庭園に、鞦韆が音もなく揺れてゐる。家と家との間の往來にチラリと見える電車も、音もなく迂つて行く。何といふ靜さだらう！

チラリと眼先に動く物があるのでまた其方に心を向けると、佛英和女學校の赤煉瓦の窓から、白い物を冠つた尼さんが、矢張り音もなく動いてゐる。物音は總て一つになつて天に昇つてしまつたのだらう。動くものは唯だ黙つて動き、何からとも分らない物音が、唯だ何處からともなく響いて来る。九段あたりの高臺の空をさして流れて行く煙突の煙、それを追つて行くと、遙に浮き出したやうに富士の姿がある。

パンパン！ふと眼の下から獨立して枯れた木の響きが起る。女湯の

流しを知らせる拍子木の音である。

然し、この靜かに平和さうな春を餘所よそにして、私の氣分は段々悪くなつて來る。病的に睡ねむいやうな働かない頭、けつたるく痛い兩腕、胃のあたりから押し出されて來る生あくびそしてどうにも仕様のない一體の氣持悪さ、あゝ！

取り替へ引替へ病氣をしてゐる三年越しの弱い体にも呆れるけれど、その打撃に堪へられ、又飽かず堪へようとしてゐる心のみぢめさ、いつ來て見ても元氣だと人は云ふけれども、時には母親のかへりを待ち切れぬ子供のやうに、心細く寂しく、ひとりめそ／＼と泣いてゐることもあるのである。

○

私達病人に取つて、お醫者様はまことに全能の者であるべき筈である。それ故、ミツワの賣藥の廣告をみて、そこに書いてある腎臓炎の症狀なるものが、すっかり私のやつてゐるところと符合しても、その廣告に従つてミツワ人參錠を買つて用ゐるといふ簡單さを排して、わざ／＼その道で有名な博士の診察を受けに行く。さうしてすべての苦痛を訴へる事によつて、直すぐにもそれらの悩みが癒やされるかのやうな期待を抱く。ところ

が、私が全身全靈をあげて悩んだところの、その名狀すべからざる、適當な言葉のない個性ある痛みや氣持悪さやが、既往症を取る醫者の手によつて、主訴の部に、食思不振、惡心、頭痛、嘔吐、などゝいふ、抽象され、概括された文字となつて現はされる。

博士は、その素人から聴取した、廻りくどいけれども實感的な言葉を類別的な専門語に書き改められた既往症を手にとつて、既に頭の中に半分患者を診みてしまひ、それから手を下して様々な機械を用ゐて肉體を診察する。そして診察くたを下す。處方が書き取られる。それから患者に向つて食物を制限し、安靜にすべき事を命令する。そこには最早や一つの有りふれた病氣より外に、私の病んでゐる病氣はない。

私は安心したやうな、又がつかりしたやうな、興奮した、その癖狐につまゝれたやうな氣持ちで歸つて來る。やがて自分一人になつて床の上に横はつて見ると、病苦はやつぱり私一人のものになつて私を責せめ苛さいむ。病氣は有り觸ふれてゐても、私にとつてのその影響は決して有り觸れてゐない。確かに彼は獨立したものである。

毎日し、よ、う、事のない、厭な日が續く。でそろ／＼又お医者様が頼りになり出して出掛てゆく。今度こそはあそこもかう、こゝもかうと訴へてそれが何故であるかを説明して貰ひ且つ又その苦痛を軽減して貰はうといふ、押へる事の出来ない期待を抱いて診察の順番を待つ。ところで一歩診察室に入つたが最後、私の病氣は極一般的なもの、さうである以上さうした苦痛は至極當り前なものであり、それは何等の特別な意味も持つてないこと、従つて言つたつても甲斐のないこと、言ひかへれば博士にまで口外するの値打ちがないことを私は知るのである。

醫學に對する信頼と失望とが、私の生活をジャンポンに襲つて來る。といつて、神にのみ一切を負はするには餘りに信仰の薄き者であるによつて、苦痛の重荷は、それが自然に輕くなる時まで、私の肉体に重いのである。たゞ私は本能的に、苦痛はたゞ堪へる事より外に、それを輕くする方法がないのを僅かに知つてゐる。

○

美しく輕やかに粧つた從姉妹が二人、穴のやうな下宿の一間に匂ひと色とを齎した。三越の歸りなのださ

うである。黄な水仙としほらしい小梅さくらとを一人が、一人は飛行船の形ちをしたゴム風船を持つて、すらりと賑かに入つて來たのを、私は春に目をみはつたやうに見上げた。櫻を浮織にした、あつさりとした藤色のお揃ひの半襟、あれがこの春の流行なのであらうと、やがて消えて行く足音を逐ながら私はひとりで思つた。

【入力者注】

底本は総ルビですが、ふり仮名は一部のみ残しました。

底本と行を合わせるために、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本…讀賣新聞

大正七(1918)年四月十四日朝刊

テキスト入力…小林 徹

公開…令和五年七月二十八日

リンク…[水野仙子書誌年譜](#)